
Cross ~交わるもの~

奏譜 ゆず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cross ～交わるもの～

【Nコード】

N6678Y

【作者名】

奏譜 ゆず

【あらすじ】

あの日、あの、大火事のあった日。

校舎内にいた人間の中でただ一人 生き残ることができた わたし

水乃 梨暗は、

炎に赤く染まる校舎で ある2人の男の子に出会った。

その2人は わたしとはまるで、『サカサマ』の存在。

わたしとは対の存在。

2人は言った。

わたしが火の中にも熱くないのは 火傷の一つもしないのは
わたしが彼らと同じ、

『十字』の人間だから。

あの日、わたしだけ生き残ることができた理由とは？

彼らの正体と、

わたし自身の十字としての正体とは？

そもそも十字とはなんなのか。

(ファンタジーっぽくないけれど、一応ファンタジーのつもりです。
最初がちょっと残酷なだけで、後は全然です。

男の子がいつぱいでてくる、少女マンガ的な展開が多いです。

『十字』という言葉がたくさん出てきますが、宗教とはほとんど関係ありません。

設定は中2のころ考えたもの、書き始めたのは中3、ということまで、
至らぬ点ばかりかとは思いますが、よろしく願います。(

No.1 夕美市立夕美中学校（前書き）

ノートに書いてあるものを打ちなおしてます。

ノートではすでにNo.52まで書き終わっているのので、
そこまではスムーズに更新できると思います。

No. 1 夕美市立夕美中学校

わたしは、教室にいた。

赤く染まった教室にいた。

わたしは、教室をつつんでいく炎の中にいた。

なのに どうして

優理ちゃんゆいりは休みだって、今朝、先生が言っていた。

だから、いつもは3人の教室移動も、今日は紗夜ちゃんさよと2人だった。

2時間目の理科の授業が終わって理科室から教室へ戻ると、もう次の授業の先生がいて、黒板になにか書いていた。

「起立」 級長が号令をかけた。

3時間目の授業は社会。

最後の授業が 始まった。

わたし、水乃みずの 梨暗りあんは、夕美市立夕美中学校の中学3年生である。

ゆるく波打つ、肩まである特徴的な黒い髪を左右でゆるくむすんでいる。

このゆるく波打つ黒髪は、祖母ゆずりらしい。

祖母はもういないが、不思議な人だった。

わたしがいつもかけている伊達メガネも、祖母がくれた物だ。

『梨暗は昔のわたしに似てるから、これをいつもかけているように』と、

そう言って、わたしにかけてくれた。

その日から、わたしは家の外ではいつもこのメガネをかけている。首につけているペンダントも、祖母がくれた物だ。

縦長のひし形で、中央には黒く十字架のような刻みがあり、その上に何本もの線がからまるように刻んである不思議なデザイン。

祖母が、他界する寸前にわたしにつけてくれた物だが、その日からはずれなくなってしまった。

先生に何度も注意されたが、何度はずそうとしてもはずれず、切ろうとしたこともあったが、かたいのか、切りにくい素材なのか、全く切れなかった。

結局、小学4年生だったその日から今までに、はずれたことは一回もない。

そう、祖母はそんな不思議な人だった。

だが、わたしがそれを気にすることはなかった。

わたしにとっては、それが祖母の当たり前だったから。だから、わたしは知るはずもなかった。

祖母という人、その全てが、今のわたしにとって、重要な意味をもたらしていた、ということ。

社会の授業中。

わたしは、配られたプリントの問題を解いていた。

黒板には、『先生は研究授業で隣の教室へ行くので、配ったプリントをやっておくこと』と、白いチョークで書いてある。

2年生までの復習プリントで、表が地理で裏が歴史になっている。

わたしはなんとなく、裏の歴史の問題からやっていた。

後半では、日清戦争、日露戦争など、戦争についての問題が多くなっていた。

戦争　　多くの死者を出した戦争。

でもわたしは、いつもこう思ってしまう。

人って、こんな簡単に死ぬものなんだろうか

戦争に関する資料を読んでも、写真や映像を見ても、自分が、銃で撃たれたり、爆発にまきこまれたりするだけで死んでしまうなんて、とても思えなかった。

わたしが、こんな簡単に死ぬはずない。

そんな自信さえあった。

何故そう思うのかはわからない。でも、本当にそう思っていた。

わたしは、そんな簡単には

・・・

「!!!!!!?????」

突然の爆発音。

こんなことを考えていた最中だったので、一瞬、爆弾でもふっってきたのかと思った。が、どうやら違うらしい。

「みなさん、落ち着きなさい。」

隣の教室から戻ってきた先生がそう言い、生徒たちは一瞬我に返る。

だが、次の瞬間、

「っ!!」

再びの爆発音。と同時に、

『ボオ・・・』

という、なにかに火がつく音が聞こえ、生徒たちはまた騒ぎはじめた。

「キヤアアアア!!」

女子生徒のだけれが、悲鳴をあげた。

見ると、窓の外、向かいの校舎が燃えていた。

先生が、慌てて教室のドアを引こうとしたが、

「・・・あかない・・・?」

さっきまであいていたはずのドア、窓は何故か全部閉まっていた。

鍵はかかっていないのに、何故か、あかない。

「先生、窓を割りましょう!!」

誰かが叫んだ。

生徒たちが、次々にイスを思いつきり窓ガラスにぶつける。

「……………!!」

渡り廊下を通じて、炎はこちらまでおしよせていた。

窓ガラスは割れない。

炎のスピードは速く、教室まで入り込んでくる。

「……………っ！間に合わないっ……………!!」

。

わたしは、教室にいた。

赤く染まった教室にいた。

わたしは、教室をつつんでいく炎の中にいた。

あたりを見渡してみた。

みんな、床の上に転がっていた。

そんななかで、わたしは一人、炎の中に立っていた。

床の上のクラスメイトたちの中に、親友の姿を見つけた。

「紗夜ちゃん!!」

大声で声をかけるが返事はない。

わたしは、急いで親友のもとへとかけよる。

「……………っ……………!!」

わたしは思わず目をそらした。

彼女が、あまりにもひどい姿だったからである。

よく見ると、他の生徒たちもみんなそうだった。

全身に火傷をおい、言葉にできないほど、無残な姿のクラスメイトたちがいた。

「い……いやっ……!」

そんな悲惨な光景から目をそらし、思わず自分の体を見る。自分も、みんなのようになっていたって、おかしくないのに。

「……どうして……?」

火傷どころか、傷ひとつなかった。

そういえば、さっきからわたしは炎の中にいるのに、『暑い』と感じるだけで、全く『熱さ』や『痛さ』を感じない。

さっきまで、社会のプリントを解きながら考えていたことを思い出して、わたしは少し、自分自身をこわく感じた。

「だれか、わたしの声聞こえてる人いますか!? いたら返事してください!!! 手をあげてください!!!」

床の上のクラスメイトたちに大声で問いかける。

だが、反応はない。

「……ドア……あかないかな。」

とにかく、もうこの教室にはいたくなかった。

わたしは、引き戸に手をかけた。

普通に、あいた。

「なんで……?」

さっきは誰があげようとしてもあかなかったはずなのに。でも、これでやっと、教室の外に出られる。

わたしは廊下へ出ると、階段へ向かって走り出した。

走っている途中で何度も火の中を通ったが、服も体も、焦げ目ひとつつかなかった。

とにかく校舎から出ようと思い、3年生の教室のある4階から、1階までかけおりようとした。が、

「……?」

わたしは、3階におりたところで足をとめた。

3階の、1年生の教室がある廊下の奥に、一瞬、人影のようなものが見えたからである。

「だれか……いるの……?」

わたしはの廊下を歩き始めた。

しかし、もう人影は見えない。

「教室に入っちゃった・・・とか・・・？」

わたしは近くの教室の引き戸に手をかけた。その時、

「・・・っ!？」

強い気配を感じて、ふりかえった。

そこにいたのは、高校生くらいの2人の男の子。

「永斗^{えと}、さっきから動いてた人の気配って・・・」

「ああ。やっぱり十字か・・・。」

その瞬間、ひとつだけわかったのは、

その2人が

わたしとは正反対のモノだったこと。

No.1 夕美市立夕美中学校（後書き）

話が進むごとに一話分が長くなっていきましたが、最後まで読んでいただけると嬉しいです。

No.2 サカサマのモノ

「遠十字園の人・・・ですよね？」

そうわかったのは、その2人が着ていたのが、あの有名私立学園、『遠十字園』の制服だったからである。

「僕たちでさえ、これだけの力しか感じられないってことは、全くそういう力を覚醒できてないってこと。この子・・・なにも知らないらしいね。」

一方の男の子。少しだけ紺色がかった黒髪の彼が言った。口には笑みの形をつくっている。

「・・・あの首のペンダント、十字のものじゃないか・・・？」
もう一方の男の子。ほとんど灰色に近い黒髪の彼が言った。

こちらは無表情。

「なんで、遠十字園の人がここに・・・？」
「なんで、この人たちは・・・」

「・・・白い逆十字が、大きな力を使う気配がしたから・・・ね、
永斗。」

「・・・それよりお前、俺たちから何も感じないのか？」
「えっ・・・。」
感じる？

それは、この感覚のことだろうか。
さつきから感じている、この感覚。

この2人から、何か大きくて深いもの・・・わたしとは全く正反対のものを。

この2人は・・・わたしとは逆。

サカサマだ。

「感じていない・・・ことも、ないみたいだね。君、ちょっとそのペンダント、見せてくれない？」

紺色の髪の毛の男の子が近づいてきて、そっとペンダントにふれる。
なんだろう・・・この感じ。なんで・・・

なんで、この人たちは、こんなにもこわ

いんだろう。

「……！永斗、見て。」

「どうした？」

もう一人の、灰色の髪の男の子も近づいてきて、わたしのペンダントを覗き込んだ。

「これ、黒正十字の十字の象徴だよ……。」

「ああ……かなりの伏せ線の量だな。」

紺色の髪の男の子は、顔をあげるとわたしの顔を見て、

「このペンダント、どうしたの？」
と聞いてきた。

「これは……おばあちゃ……わたしの祖母が、くれた物です。」

「君のおばあさんが？」

「……はい。」

わたしがこたええると、その男の子はなにか考えているようにわたしの顔をじっと見つめたあと、

「ただの十字なら、ほおっておくつもりだったんだけど……。」

と、呟いた。

「あ、あの……。」

このペンダントのこと、なにか知っているのだろうか。

「……有逆、サイレンの音が聞こえないか？」

「ああ。やつと来たみたいだね。」

炎の音がうるさくてよく聞こえないけれど、確かに、耳をすませばかすかに消防車と救急車のサイレンの音がする。

「じゃあ、僕たちは行くこうか。また会いに行くことになると思うけど……。」

「待つてくさいっ、あの……。」

ペンダントのこと、なにか知っているなら教えてほしい。

「君、周りの状況見えてる？」

紺色の髪の男の子が言った。

「えっ……。」

「思い出して？今君は、何よりも最優先にこの校舎から出るべきだ。」

「あ……。」

この2人の大きすぎる存在感に圧倒されて、頭から消えかかっていた。

今わたしは、火事の校舎にいるんだ。

「そうだ……はやく出ないと……。」

クラスメイトを……紗夜ちゃんたちを助けるためにも……。

思い出した瞬間、今度はこの2人のこと、ペンダントのことが頭から消えていった。

わたしは、再び走り出した。

外へ出ると、運動場にはたくさんの消防車や救急車がとまっていた。そのもう少しむこうには、たくさんの人が集まっている。きっとほとんども、生徒の保護者や家族なのだろう。

わたしが運動場へ出ると、消防隊員の人々が、驚いた表情で近づいてきた。

「君、よく自力で出てこられたね。そこに救急車がとまっているから、傷の手当てを……。」

「いえ、大丈夫です。どこも怪我してませんから。」

わたしがそう言うと、消防隊員の人はずっと驚いた顔になった。

「本当に……！？本当にどこも怪我してないのかい……？」

「はい。それよりも、早くみんなの救助をお願いします！」

「大丈夫だよ。今、消火活動と同時に、救助にむかっているから。」
見ると、確かに何人も消防隊が、昇降口から、ベランダの窓から、校舎内に入ろうとしていた。

「あの、教室に入るには、窓ガラスを割るしかないと思います。窓もドアも、すごくかたくて動かないんです。」

「え・・・？大丈夫だよ。消防隊員の人はみんな力あるから。たしかに、全く動かなかった場合はそうするしかないかもしれないが、全部のドアや窓が動かないってわけじゃないだろう。」

「ダメです！・・・たぶん全部、動かないんです。」

「君も、窓ガラスを割って出てきたのかい？」

「いえ、わたしは・・・。」

「君でも開いたのだから、大丈夫。」

「・・・とにかく、お願いします・・・。」

わたしはそこまで言うと、人ごみにむかって走った。

「梨暗！！」

人ごみの中、大声で名前を呼ばれ振り向くと、お父さんとお母さんが立っていた。

「お父さん、お母さん・・・！」

なんとか人ごみをかきわけて2人のもとへ行くと、お母さんに、体をギュツと抱きしめられた。

「梨暗・・・よかった・・・無事で・・・。」

「本当にお前、心配したんだぞ・・・？」

「・・・うん・・・。」

わたしは、赤く燃える校舎を見上げた。

大丈夫。わたしが助かったんだから、きっとみんなも助かる。

わたしは、お父さんとお母さんと一緒に、家に帰った。

もう寝てしまおうと思った。

どんなに心配しても、どうせ自分では何もできない。

だから、この不安と恐怖から逃れるには、それが一番だと、

そう思ってベッドにもぐりこんだのだが、こんな状況で寝られるはずもなく、気を紛らわそうと、なんとなくテレビをつけて、

「・・・。」

すぐに消した。

火事の生中継がやっていたからである。

結局わたしは、それからしばらく布団の中で、一人不安と戦っていた。

時計を見るともう午後11時。

もちろん、食事なんてとっていない。

お母さんやお父さんが、一度もわたしの部屋を訪ねて来なかったのは、わたしを気づかっていたことなのだろうか。

わたしはベッドから降りると、窓の外を見つめた。

あのとときと同じ、気配がした。

窓を開けて現れたのは、やっぱりあのとときの2人だった。

「こんな時間にごめんね。あれ、まだ制服なの？」

そう言つて、先に部屋に入ってきたのは紺色の髪の男の子。

土足でいきなりあがりこんできたのかと思つたら、足には学校の上履きのようなものを履いていた。

「・・・俺たちだつて制服だろ。」

灰色の髪の男の子も、その後から部屋に入ってくる。

「・・・なにしに、来たんですか？・・・誰なんですか・・・」

「・・・俺は、黒逆十字の最十持者、遠十 永斗。十字では『エト』」

「僕は、もう一人の黒逆十字最十持者、遠十 有逆十字では『アル

キ』・・・言つてることわかる？」

「・・・いいえ。」

「やっぱり・・・、君はなににも知らないみたいだね。」

「……………」

「いったい何なんだろう。」

「…というか、なんであのととき校舎に」

「……………あなたたちは、さっきの火事と、何か関係があるんですか？」

「……………関係？関係があるのは、君のほうだよ。」

有逆と名乗った男の子が言った。

「え……………」

「あのととき校舎に君がいたから、この火事は起きたんだよ。」

「……………どういう、ことですか……………」

「火をつけた奴……………、白逆十字の目的はお前だ。お前を見つけ出すために、校舎に火をつけた。」

永斗と名乗った男の子が言った。

「わたしが……………原因、なんですか……………」

「そうだよ。君があのととき、あの場所にいたから、君以外みんな死んだんだよ。」

「……………みんな……………」

「そう。みんな、だよ。」

「そんなはず……………」

そんなはずない。助かった人だつてきつというはず

『ピッ』

テレビがついた。誰もリモコンにはふれていないのに。

「あ……………」

白い煙が映っていた。うつすらと、煙のむこうに校舎のシルエットが見える。

赤い炎はもう見えないが、消火活動は続いているようだ。

そんな映像の上に、白い文字が映し出されていた。

『校舎内にいた生徒、教職員、1人をのぞき全員の死亡を確認』

「うそ……………」

「あの校舎全体を密封してあったからね。十字の者でないかぎり、出ることも入ることもできない。」

「なんで……。」

「君があのとときあの場所にいたから。」
「なんで？」

「みんなが死んだのは、君のせいだよ。」
「わたしのせいなの？」

どうして ……？

「おい、有逆。」

「……なに？永斗。」

「お前、なにがしたい？」

「べつになにも……永斗、怒ってるの？」

「わたしのせいなの？どうして？なんで？なんでみんな、どうしてわたしだけ、どうして？なにが？なんで？どうして……？」

「……パニックにおちいっちゃったみたいだね、彼女……どうする？」

「そうさせたのはお前だろ。」

「それもそうだね。」

「……お前、この状況を楽しんでるだろ。」

「わたしのせいなの？わたしの ……。」

「おい、落ち着け。」

永斗と名乗った男の子が、わたしの肩をつかんだ。

「……。」

「お前のせいじゃない。」

「え……。」

「悪いのは火をつけた人間であってお前じゃない。校舎内にいた人間が巻き込まれたのも偶然だ。」

「そうだね。自分を責めたって、どうにもならないよ？」

「だから、そうさせたのはお前だろ。」

「そうかもね。でも・・・」

彼は、一度わたしから目をそらし、もう一度わたしを見ると、

「君、遠十学園に来ない？」

そう、言った。

私立 とおとがくえん 遠十学園。

初等部から大学院まである、このあたりでは名の知れた私立学園である。

わたしの住む夕美市内にある学園だが、かなり頭の良い人か、かなりのお金持ちしかは入れない、と聞いたことがある。

「今日、俺たちがここへ来たのは、それを聞くためだ。」

「・・・でもわたし、頭良くないし、お金もないです。」

「そんなの大丈夫。僕たちが、特別編入させてあげるから。」

「特別編入・・・？そんなことで・・・そういえば、2人の苗字
つて・・・。」

『遠十 永斗』 『遠十 有逆』

遠十・・・？

「俺たちは、遠十学園理事長の孫・・・ということになっている。」

「僕と永斗は、いとこ同士なんだよ。」

「・・・なんで、わたしを遠十学園に入れようとするんですか？
この2人の目的は・・・」

「言ったでしょ？白い逆十字が君を探している。今回の火事で、君の存在を確認できたと思うしね。ここにいるのは君にとっても危険だし・・・僕たちも、君のような存在を白逆十字に渡すわけにはいかない。」

「つまり、この家を出て、学園に住まないか、ということだ。その
ほうがお前にとってもいい。お前が嫌なら、無理には言わないが。」

「

あの私立学園に、わたしが・・・？

「永斗は優しすぎだよ。僕はなんとしてでも君を学園に入れるつもりだよ。そのほうがいろいろ都合がいいしね。どうせ、他の市立中学に転校することになるだろうし、それなら・・・。」

「でも、家を出なくちゃいけないんですね。」
「やっぱり、家族と離れて暮らすのはさみしい。」

「全く家に帰れなくなるわけじゃないし・・・ここにいたら、いずれ白逆十字が君を迎えに来るよ？君だって、学校を燃やしてしまうような人たちのところに行きたくはないでしょう？」

「・・・どうして、その人たちはわたしを・・・というか、十字って、なんなんですか・・・？」

「もし学園に入ってくれるのなら、いろいろとくわしく教えてあげるよ。それに、僕たちと行動すれば、火をつけた本人に会うことができるかもしれない。」

会う　・・・？

友達を、学校のみんなを殺した人に・・・？

「それは、こわいですけど・・・。」

・・・でも

「今日の出来事については、やっぱりくわしく知りたいです。・・・その・・・考えておきます。」

「そう。じゃあ、早いほうがいいし、明日の夜にまた来るから、そのときまでに決めておいてね。」

「えっ、明日・・・ですか・・・？」

「よろしくね。」

そう言っつて、2人はさっさと窓から出ようとして、

「・・・そういえばお前、名前は？」

1人がそう聞いてきた。もう1人も振り返ってわたしを見た。

「水乃　梨暗です。」

「・・・じゃあ、梨暗？おやすみ。また明日。」

1人がそう言っつて窓から出て行く。もう1人も出ていこうとしたと

ころで、

「待つて!!」

わたしはひきとめていた。

1つだけ、聞いておきたいことがあった。

「なんだ。」

「あの……あなたたちは……」

彼らの存在感には、大きな違和感はある。それはまるで、わたしをひっくりかえしたような……。

「あなたたちは……『サカサマ』……なの？」

「……ああ。」

窓から漏れた月の光に照らされた彼の灰色の髪は、

暗い夜の黒に映える銀色をしていた。

No.3 私ノ選択

朝起きると、ケイタイにメールが届いていた。

「誰……?」

ケイタイを開き画面を見ると、そこには親友の名前が表示されていた。

「……!!優理ちゃん……!!?」

急いでメールを開くと、そこにはこう書いてあった。

『昨日、いろいろあったみたいだけど、とにかく梨暗が無事でよかったです!!』

わたしは偶然風邪で学校休んでたおかげで助かったけど、

……紗夜は助からなかったけど、わたしたち2人はこれからもずっと親友だよ。

本当に、梨暗が無事でよかった。

これってキセキだね。

あ、なんか長くなっちゃってごめん。

できたら返信くれると嬉しいです。』

「そうだ、優理ちゃんは無事だったんだ……。」

優理ちゃんだつてつらいはずなのに。

優理ちゃんのメールはどこまでも前向きだった。

「……。」

わたしは一言だけ返信すると、部屋の窓のカーテンを開けた。

そういえば、この部屋は2階である。

昨日のあの2人は、どうやってこの窓から部屋に入って来たのだろうか。

そんなことを考えながら下へおけると、リビングにお母さんがいた。

「お母さん……?」

わたしが声をかけるとお母さんはハツとした顔をして、

「梨暗っ!?!あ……朝ごはん用意するわね……。」

と言いながらバタバタと台所のほうへ行ってしまう。
壁に掛けてある時計を見ると、もう9時45分すぎ。

今日は水曜日なので、普通なら学校で授業をうけている時間である。わたしが、お母さんがさつきまで座っていたテーブル前のイスにすわると、お母さんがさつきとトーストと目玉焼きをのせたお皿を持ってきて、わたしの前のテーブルに置いた。

「・・・食欲なかったら、残してもいいからね・・・？」

「ううん、大丈夫。お父さんは仕事？」

「・・・うん。今日くらい、休んでくれてもいいのに・・・」

「ううん、いいの。わたしは大丈夫だから。」

するとお母さんは、わたしをじっと見つめて言った。

「梨暗・・・大丈夫って・・・本当に？昨日はずいぶん遅くまで起きてたみたいけど・・・それに・・・梨暗、知ってる・・・？昨日の火事で、」

「うん。知ってる。ニュースで見た。でも、だからといって、わたしにはどうすることもできないし、ずっと落ち込んでても仕方ないでしょ？それに、優理ちゃんも、同じこと思ってるみたいだし。」
それを笑顔と一緒に言えたのは、ある意味キセキだったのかもしれない。

「梨暗・・・ごめん・・・。」

わたしの言葉を聞いて、お母さんはポロポロと涙をこぼしはじめた。

「・・・なんでお母さんが謝るの・・・？それに、お母さんが泣いてちゃ意味ないよ。」

「・・・うん・・・そうね・・・。」

本当は、大丈夫なはずない。

この朝食だって、全部食べられるかどうか、正直あやしかった。

なんとか全部食べ終わり、することもなくソファに座っていると、食器を洗っていたお母さんが話しかけてきた。

「学校、再来週の月曜日までは、市内の小、中、高、全校休校だつて。再来週からは、夕美北中学校に通うことになるって。転入手続とかは、全部むこうがやってくれるみたい……。」

「あっ、」

その言葉で、わたしは昨日の2人との会話を思い出した。

「そのことなんだけど……あのね、お母さん、わたし……」

少しためらってから、それからもう一度、口を開く。

「遠十学園に、入ろうかと思って……。」

するとお母さんは思ったとおり、とても驚いた顔をした。

「いきなりどうして？そんなお金、うちには……。」

「特別編入させてくれるって。入学金もいらなくて。」

「それは、他の子……、昨日学校を休んでいた子たちもいっしょに？」

「えつと……。」

特別編入させてくれるのはわたしだけ、なんて言ったら、きっと不自然に思われるだろう。

かと言って、本当のことを言うわけにも……。

「いろいろ事情があって、1人だけしか編入を許可することができないらしくて……、それで、わたしが選ばれたらしいの。わたしもよくわからないけど……。」

とりあえず、そう言ってみた。

「そう……。あなただけが……ね……。」

……信じてくれたのかどうかはわからないが、とりあえず話を続けることにした。

「編入すると、学園で暮らすことになるけど、たまには家にも帰れると思うし……いいでしょ？」

お母さんは、じつとわたしを見ている。

「なんで、遠十学園に入ろうと思ったの？」

「それは……。」

火事の真相を知るために……、なんて言えない。

「えっと・・・そう、このペンダント・・・このペンダントのことと、おばあちゃんのことをよく知っている人が、学園にいるらしくて・・・。それで、その人と、話がしてみたくて・・・。学園に編入すれば、いつでもたたくさんおばあちゃんのこと、聞けるでしょう？わたし、知りたいの。おばあちゃんのこと・・・。おばあちゃん、不思議な人だったし、きつとなにかいろいろあると思うの。はずれなくなっちゃった、このペンダントのことも・・・。」

「そう・・・。」

お母さんは一度目を閉じて、

「・・・本当は、それだけじゃないんでしょう？」
と、そう言った。

お母さんは、わたしをじっと見つめてくる。

それから、再び口を開いた。

「梨暗が、そこまで言うなら・・・。でも、本当にいいの？優理ちゃんとも、別の学校に行くことになるのよ？」

「あ・・・。」

そうだった。

わたしが遠十学園へ編入してしまったら、おそらく夕美北中へ行くだろう優理ちゃんとは、ほとんど会えなくなってしまう。

でも・・・

「それでも、いいの。」

わたしはそうこたえた。

「・・・そう。じゃあ、夕美北中には、そう連絡しておくわね。」

お母さんは、お皿を拭き終わると、電話をとった。

「わたし、ちよっと出かけてくる！」

わたしはそう叫ぶと、急いで支度をはじめた。

しばらく自転車を走らせていると、夕美中のある通りへと出た。

わたしは自転車からおりると、その道を歩き出した。

わたしは今、優理ちゃんの家へむかっている。

優理ちゃんの家に行くのなら、他にも道はあるのだが、あえてこの道を選んだのにも、ちゃんと理由わけがあった。

一歩進むごとに恐怖感がつのっていくのを感じながら、わたしは歩いていった。

学校の校門前には、人がたくさん集まっていた。

警察の人もたくさんいて、どうやら学校は立ち入り禁止になっているらしい。

わたしがまず驚いたのは、あんなに大きな火事だったのに、一晩で火が完全に消えていたことである。

人がたくさんいるため、校舎の様子はよく見えないが、ここから見る限りだと煙も出ていないし、消防車もとまっていけないので、おそらく火はもう消えたのだろう。

次に驚いたのは、学校のまわりの家や建物に、全く被害がなかったことだ。

体育館や、運動場にあった倉庫なども全て焼けてしまっているのに、学校のすぐ隣にある家は、何の被害もなさそうな状態だった。

わたしは、人ごみの中をかきわけて道を進んだ。

その途中、生徒たちの保護者と思われる主婦たちの会話が耳に入ってきた。

「火事するとき校舎内にいた生徒の中に、1人だけ助かった子がいるんですって。」

それはきつと、わたしのことだ。

「生徒も教師も、他の人は全員焼死したのに、1人だけ助かるなん

て・・・おかしいわよね。しかもその子、無傷だったらいいじゃない？」

「そうなの！？・・・そういえばこの火事、放火だって噂じゃない。その子が火つけたんじゃないの！？」

はっ とした。

そうか。

1人だけ助かったというのは、他の人から見れば、そういうふうに見えるんだ。

「きつとその子が、わたしの子を殺したのよ！！」

「ちよつと、あまり大声だしちゃダメよ。もしかしたらその子や、その子の保護者が来てるかもしれないわよ？」

制服で来なくてよかった。

他の学校の生徒も見に来ているので、私服ならきつと気づかれない。それにしても、まわりに被害が出なかったのは、不幸中の幸いというか・・・。」

「そうですね・・・。遺体の回収も、全て一晩で済んだようですよ・・・。普通なら、一晩で、なんて不可能ですよね・・・。」

遺体。

その単語を聞いた瞬間、抑えていたはずの感情があふれそうになった。

わたしは人ごみをぬけると、もう一度自転車に乗る。

そして、再び優理ちゃんの家にもかった。

「梨暗っ！？どうしたの？」

インターフォンを押してしばらくして、慌てて玄関から出てきた優理ちゃんが言った。

「ちよつと、優理ちゃんに話したいことがあって・・・。」

「来るならメールしてくれればいいのに。とりあえず、中入る？」

「うん・・・お邪魔します。」

優理ちゃんの部屋は、いつも綺麗に片付いている。

「そのへん、てきとうに座っていいよ。」

「ありがとう。・・・お母さんとお父さんはいないの？」

「うん。外出中。なんか飲む？持ってこようか。」

「ううん、いいの。」

優理ちゃんがベッドを背もたれに床に座ったので、わたしも横に座った。

「で・・・話したいことって?・・・昨日のこと？」

「それもあるけど・・・あのね、優理ちゃん、わたし・・・」

優理ちゃんは、わたしの顔をのぞきこんでいる。

「遠十学園に、入ることにしたの。」

「え・・・」

そつと優理ちゃんの顔を見上げると、目を見開いてわたしを見ていた。

「その・・・だから、学校いっしょに通えなくなっちゃうけど、でも・・・」

「どうして・・・!?!?」

優理ちゃんは、強い口調でそう言った。

「なんで・・・遠十学園・・・!?!?」

「えっ・・・優理ちゃ・・・」

「あ・・・」

すると、優理ちゃんは、ふと気がついたようにわたしを見つめて、

「ごめん・・・突然そんなこと言うから、驚いちゃった。」

「あ・・・その、いきなりこんなこと言ってごめん。でも、遠十学園で、どうしてもやりたいことがあって・・・」

「わかった。」

「え?」

優理ちゃんの顔には、強めの笑みがうかんでいた。

「梨暗が決めたことだもんね。・・・学校が別々になっちゃうのは

さみしいけど、わたしがどうこう言えることでもないし。」

「ありがとう……。学園で暮らすことになるから、なかなか会えなくなっちゃうかもしれないけど……。」

「大丈夫。わたし、毎日メール送るから。」

「……。うん。わたしも。」

わたしは、ほっとしていた。優理ちゃんが賛成してくれて。

そして、とても嬉しかった。優理ちゃんが言ってくれた言葉が。

わたしは、来たときは正反対の気持ちで、優理ちゃんの家を出たのだった。

彼女は、1人悩んでいた。

親友が、よりによって、あの遠く学園に行くというのだ。

「やっぱり、あの2人が……。」

窓からは風が入ってきていて、カーテンが揺れている。

「あの2人に、梨暗はわたさない……。だって梨暗は、」

彼女は、カーテンを開いて窓から外を見下ろした。

そこには、彼女の大切な親友の姿がある。

「わたしたちのモノなんだから。」

風が、彼女の髪を揺らした。

No.4 私立遠十学園

「じゃあ、来てくれるんだね。僕たちの学園に。」

「はい。」

「お前、本当にそれでいいのか？」

「はい。わたしには、……やらなきゃいけないことが、あるんだと思います。」

今は午後11時すぎ。彼らは昨日の約束どおり、再びわたしの部屋へあらわれた。

「それで……その……学園に入ったら、十字……？のことでか、話してくれるんですね……。」

「ああ。そういう約束だからな。」

その言葉に、わたしはほつとした。

「できれば明日には学園に来て欲しいんだけど……。いろいろやつてもらいたいこともあるし……。」

「明日……!!ですか……!?!？」

「無理なら、もっと後でも構わないが。」

「いえ……たぶん大丈夫です。なんとかかします。」

お母さんたちも、説得すればたぶんなんとか……

気がつくと、有逆くんがじつところちを見ていた。

「あ……えつと……なんですか……?」

「今日はメガネかけてないんだね。髪もほどいてる。」

「あ、はい。……家ではいつもこうなんです。」

「……永斗、誰かに似てると思わない?」

永斗くんが、わたしをじつと見つめてくる。

「……似てるというか、見覚えが……絵画……か……?」

「うん。僕もどこかで見た覚えがあるような気がするんだ。たぶん、絵画……長くてウェーブのかかった漆黒の髪に、神秘を思

わせる顔立ちの女性が描かれた絵」

神秘を思わせる顔立ち . . . ?

自分がそんな顔をしてるとは思わないが、 . . . 絵画 . . . ?

「絵画 ですか?」

「そう。絵画。たぶん十字関連の。よほど十字の世界に大きく影響を及ぼした人間でないと、絵に描かれることなんてないだろうから . . . もしかしたら梨暗の家系は、僕たちが思っている以上にすごいものなのかもしれないね。」

「え ?」

「まあ、詳しいことは、明日 だね。1時ごろに誰かを迎えに行かせるから。」

「 はい。」

「じゃあ、僕たちはもう帰るね。また明日。」

有逆くんがそう言っつて、永斗くんが窓をあけたその時、

「待って! ください。」

昨日と同じように、引き止めていた。

昨日と違ったのは、引き止めたのが2人だったこと。それから、

「 おやすみなさい。」

続いた言葉。

「ああ。」

「おやすみ。」

2人は、それぞれ言っつと、部屋から出て行っつた。

次の日は朝からドタバタだった。

朝起きたのは6時30分すぎごろ。

それから下におりて、台所にいたお母さんとリビングにいたお父さんに、『今日、1時ごろに遠十学園から迎えの人が来るから。』と言っつて、2人に『はあ! ?』とキレられ、なんとか説得し、朝食を

食べてから急いで準備をしているともう12時45分すぎ。

急いで昼食を食べていると玄関のチャイムがなった。

「遠学園の人ですって。梨暗、玄関出てくれる？」

電話に出たお母さんが言った。

急いで玄関に出ると、そこには20代前半くらいのきれいな女の人
が立っていた。

「こんにちは。……水乃 梨暗さんですね？」

「あつ、はい……。」

「わたしは、遠学園教師の、光野 利来りくといいます。あなたの編
入先のクラスの担任でもあります。よろしくね。」

「……よろしく願います……。」
なんだか優しそうな人だ。

ちよつと安心した。

お母さんがやって来て、先生が、『保護者の方とお話したいことがあるから車で待ってて。』と言ったので、わたしは両親と別れの挨拶をすませたあと、先生の車に乗り込んだ。

後部座席に座ろうとしたら、先生に、『前でいいですよ。』と言われたので、助手席に座って待っていた。

しばらくすると、先生と、お母さんとお父さんが、玄関から出てきた。

「荷物は、後部座席にのせておいたからね。」

先生は、運転席に座ると笑顔でそう言った。

「ありがとうございます。」

なのでわたしも笑顔でかえした。

先生が車の窓を開けてくれたので、わたしは、玄関に立っているお母さんとお父さんにもう一度、

「行ってきます。」
と言った。

2人とも、

「行ってらっしゃい。」

と返してくれた。

先生が車を発進させた。

わたしは、家が見えなくなるまで、ずっと家に向かって手を振っていた。

「やっぱり、家族と別々で暮らすのは、寂しい？」

しばらくして、先生が話しかけてきた。

「……はい。」

わたしはこたえた。

「そう……。そうよね。」

わたしも、何か話しかけてみようと、話題を探す。

「……先生の、担当教科はなんですか？」

「わたし？わたしは、美術担当です。水乃さんは、美術、好き？」

「はい。大好きです。あ、でも、9教科で一番好きなのは、音楽ですけど……。」

「そうなんだ。わたしも音楽は好きよ。」

「そうなんですか。……。」

会話終了。

人と話すのは、あまり得意ではない。

もう一度話題を探す。

「……あの、ところで、わたしのクラスは何組ですか？」

「あ、そういえば言ってなかったですね。あなたのクラスは、3年3組。明るくていいクラスだから、みんなとも、きつとすぐに仲良くなれるわ。」

「あ……はい……。」

「ところで水乃さんって……理事長と知り合いなの？」

「え……？」

予想外の問いに、わたしは一瞬戸惑った。

「いえっ……違いますけど……。」

「じゃあ、永斗さんと有逆くんのお友達とか？」

「え……えっと、一昨日、知り合ったばかりです。」

「そう……。」

「……あの、えっと、それは……」

「あ、ごめんなさい。特別編入って珍しいから。もしかしたら、理事長やお二人のお知り合いなのかな、って、思って。違うならいいの。ごめんね。」

「あ……はい……。」

もしかして、わたしの特別編入の理由は、担任の先生にも説明されていないのだろうか。

「もうすぐ着きますよ。」

先生が言った。

道のむこうに、長く白い壁が見えた。

「ようこそ、遠十学園へ。」

門の前に立っていた2人が、同時に門を開いた。

「永斗くん、有逆くん、こんにちは。……あの、やっぱり、すごいところですね……。」

門の左右にのびる白い壁の扉は、視界におさまる範囲をこえて、どこまでものびている。

「いたい、中はどれほどの敷地なのだろう。」

「お二人が、わざわざ……？」

先生は、2人を見て、驚いた顔をしている。

「梨暗は特別なんですよ。あとは僕たちが引き受けますので、先生は授業にお戻りください。」

有逆くんが言った。

「……じゃあ、よろしくお願いしますね。」

先生はそう言うと、車に戻り、門をくぐって行ってしまった。

「じゃあ、荷物も置いてこないといけないし、先に君の住居に案内

するね。」

有逆くんが歩き出した。

急いで追いかけてよとすると、横から手がのびてきた。

「……………」

「荷物。」

永斗くんが、手を差し出して言った。

「持つから。」

そう言うと、わたしの手から、重たい荷物をうばっていった。

わたしは、あわてて2人のあとを追いかけた。

初等部、中等部、高等部、大学院の校舎、それからそれぞれの体育館やプール、講堂、舞踏館など、いろいろな建物の横を通り、ずいぶん奥へ進んだところで、再び門があらわれた。

さっきの門より、少し小さめの門だ。

「この門から先が、一般の生徒や教師は入れない、僕たちだけの私的居住区。」
私的居住区……?」

わたしたちが門に近づくと、重そうな門がまるで自動ドアのように勝手に開いた。

「……………あ、広い……………」

さっきまでの、たくさん建物が並んでいた場所とは違って、そこには、まるで優雅な『庭園』のような光景が広がっていた。

一面に広がる美しい花、シンメトリーに並んだ木、なかでも、一番目をひくのは、中央にある大きな噴水だ。

「この空間にあるものは全部、僕たちだけのもの。今日からは君も、自由に使っていていいよ。」

それから有逆くんは、庭園の一番奥を指して言った。

「あれが、僕たちの家、遠十の屋敷。そして今日から君の住居。」
それは、この庭園にふさわしい、立派なお屋敷だった。

「ああ。」
とりあえず、少しだけほつとした。
あとは、そのメイドさんが優しい人であることを願うのみだ。
「じゃあ、行こうか。」
有逆くんが言つて、わたしたちは再び歩き出した。

「おかえりなさいませ。エト様、アルキ様、そしてリア様。」
「ああ。」
「ただいま、ネア。」

それは、とても綺麗で優しそうな、メイド服を着た女の人だった。
ただ、その優しさの中に、なにかとても強いものと、彼らと同じサ
カサマの存在感を感じた。

「メイドの真風まかせ 音甘ねあと申します。何かありましたら、なんなりと
わたしにお申し付けください。あ、ちなみに21です。」
「・・・あ、はいっ、ありがとうございます。」
わたしがそう言つと、彼女はわたしの手をとつて言った。

「同居人に女性の方が来てくれてとても嬉しいです。エト様もアル
キ様もとてもワガママなお方で・・・特にアルキ様は・・・とても
苦労しているんですよ。」

「えっ・・・」
「ネア、余計なこと言わなくていいから。」
「すみません、アルキ様。」
そう言つて、彼女は軽く頭を下げたが、その顔は笑っている。
「それでは、お部屋にご案内しますね。リア様。」
彼女はそう言つと、永斗くんからわたしの荷物を受け取つた。

「僕たちは用があるから、ちよつと出るね。」
「はい。いつてらっしゃいませ。」
メイドさんが言つ。

「い・・・いつてらっしゃい・・・。」

これから一緒に住む人間として、
わたしもそう言った。

「こちらが、リア様のお部屋です。」

案内された部屋は、応接間やリビングを通ったすぐ先の部屋だった。

「………?」

なんだか、見覚えのある部屋。

「これって……」

「家具の配置をこのようにするよ、と、お2人に言われまして。」

机もベッドもタンスも、わたしの家のわたしの部屋と、全く同じ位置に置かれている。

「さすがに、同じ種類の家具を用意するには、少し時間が足りなかったのですが……」

「あの2人が、わたしのために……?」

彼らが、この学園にわたしを招き入れたのは、わたしのためなんかじゃない。

それをわかっけていてもなお、彼らの優しさを感じてしまう自分に、小さな戸惑いと大きな期待を感じていた。

No.4 私立遠十学園（後書き）

敬語って難しいですね。

でも、設定上どうしても敬語が多くなってしまっお話なので、頑張りたいと思います・・・。

No.5 メイドさんのAfternoon(前書き)

番外編みたいな感じ・・・かもしれません。

カットしようかとも思ったのですが、必要なエピソードが入っていたので・・・。

No.5 メイドさんとのAfternoon

わたしが遠十字園へやって来たその日、永斗くんも有逆くんもどこかへ行ってしまうて暇なわたしは、自分の部屋でメイドさんと一緒に過ごしていた。

「あの、真風さん、」

「ネア、でいいですよ。名字で呼ばれるのは慣れませんし。」

「あ、じゃあ・・・音甘さん。あの・・・、この家って、広いですね。」

「えっ？あ、はい、そうですね。」

「なんだか迷子になりそうですね・・・。」
「さつき、音甘さんに一時間ほどの時間をかけて屋敷を案内してもらった。」

でも、どこに何があるのか、全く覚えられそうにない。

「そうですね・・・リア様が十字に覚醒されてしまえば、簡単に覚えられるんですけど・・・。」

「十字・・・音甘さんも、やっぱり、その『十字』なんですか？」

「はい。エト様やアルキ様ほどの十字ではないですが、わたしも黒逆十字の人間です。」

それで、あの2人と同じ、サカサマの存在感を感じるのだろうか。

「十字って、一体・・・。」

「お2人がお帰りになりましたら、お話しますね・・・それと、もしリア様が迷子になられても、この家には十字が3人もいますから、大丈夫ですよ。すぐに助けに行きます。」

「あ、はい・・・ありがとうございます。」

「でも、リア様のお部屋が一番わかりやすい場所にありますが、そんなに心配しなくても大丈夫だと思いますよ。」

「そうですね・・・そういえば、音甘さんの部屋はどこにある

んですか？」

さつき、屋敷を案内してもらったときに、永斗くんや有逆くんの部屋は教えてもらったが、そういうえば、音甘さんの部屋は教わらなかった。

「わたしの部屋ですか？わたしの部屋は・・・C塔3階の、一番奥です。」

「え！？なんでたくさんある部屋の中から、そんな一番玄関からはなれた部屋を・・・」
しかも、3階といえば最上階だ。

「アルキ様が、そこしかダメだと。」

「有逆くんが、・・・ですか。」

「そうなんです。あの方、一見優しそうで、学園でも女子から人気あって、とにかくモテるんですけど、中身は本当にイジワルなお方で・・・」

「あ、それなんとなくわかります。」

わたしも一昨日、有逆くんのイジワルは体験している。

「でも、根は優しい方なんですよ。・・・たぶん。アルキ様も、エト様も・・・、2年間暮らしていてわかりました。」

「2年間・・・？」

「はい。実は、わたしがここにお仕えるようになったのは、お2人が高等部に入学される少し前、たった2年前からなんです。」

「てことは、今は2人は高等部2年生・・・？」

「そうです。リア様よりも2つ上ですね。」

そう言っつて音甘さんは、ふと、壁に掛けられている時計を見上げた。
「いつのまにか3時を過ぎてました。食堂に行きましょう。」

音甘さんは立ち上がって部屋のドアをあける。

食堂の場所を覚えていなかったので、わたしは慌てて追いかけた。

食堂に着いて、わたしは音甘さんに言われるまま、入口から一番近

い位置にあるイスに座った。

テレビのドラマやアニメなんかに出てきそうな食堂。

長いテーブルの両側に、ずらっとたくさんさんのイスが並べられている。住人は、わたしを入れても4人しかいないのに、こんなにたくさんイスが必要になるときがあるのだろうか。

「ちよつと待つててくださいね。」

音甘さんはそう言うと、厨房のほうへ入って行ってしまった。

「……………」

言われたとおり、わたしは黙って音甘さんを待つ。すると、

ガガガガガガガガガガ

厨房のほうからすごい音がきこえた。

「な、なんの音……？」

少し不安になりながら、それでもひたすら音甘さんを待つ。

「……………暑い……………」

次第に汗をかいてきた。

今は7月下旬。

さつきまでいた自分の部屋は冷房がきいてきて涼しかったのだが、ここはかなり暑い。

だから、厨房から出てきた音甘さんが運んでいるものを見たとき、きつとわたしの目は輝いていただろう。

「かき氷！」

「はい。お待たせしてしまつてすみません……………あ、だいぶ汗かかれていますね。あとでシャワーをあげましょうか。」

そしてわたしは、音甘さんと2人でかき氷を食べたのだった。

「わ……………広いですね。」

銭湯……………というより、洋風なつくり。

この洋館のようなお屋敷の雰囲気にあつたお風呂だ。

「ちょっと浅いですけど、泳ぐことだつてできちゃいますよ。」
そう言つて音甘さんは、イタズラっぽい笑みを浮かべる。

その言葉になんとなく地味にテンションが上がってしまったわたしは、お風呂につかるとバシャバシャやりはじめた。

「わーい・・・ほんと広いですよ。屋内プールみたい・・・」
「そうですね。」

音甘さんは自身の体に巻いたタオルをきつく抱きしめるようにしてお湯につかった。

なんとなくそれを不思議そうに見ていたわたしに気付いたのか、音甘さんは苦笑いを浮かべながら言った。

「・・・実はわたし、背中に大きな傷があるんですよ。」
「え・・・」

「けっこうひどいんで・・・やっぱり、気持ち悪いですから。」

「そんなことないと思いますけど・・・なんの、傷ですか・・・？」
わたしがたずねると、音甘さんは少しの間だけ沈黙して、

「そのうち、わかると思いますから。」
と、そう言った。

メイド服を着ているときは左右結んでいる髪をおろした音甘さんの姿は、少し違う印象を受けた。

「あれ、着替え・・・」

お風呂から出た後、着替えようと思つてカゴに手を伸ばしたのだが、なぜか着替えが消えていた。

下着やタオルはあるのだが・・・

「あ、せつかくですから、これを着てください。」
そう言つて音甘さんが持ってきたのは・・・

「え！？これを・・・ですか・・・！？」
「はい。」

「で、でもこれ・・・」
「サイズもおそらく合つはずですよ。」

「でも、」

「いいじゃないですか。さあ、リア様……」

「そろそろ、お2人がお帰りになるころですね。」

そう言いながら、音甘さんは食堂のテーブルに手際良く料理を並べている。

「あ……音甘さん……」

わたしは、そんな音甘さんの横につつ立っていた。

「音甘さんって、人にコスプレさせるのが趣味なんですか……」

「そんなことはないですよ。ただ、クローゼットにあまりにもリア様にピッタリなものがあつたので、絶対に似合うと思ひまして……」

「

料理を並べ終わると、音甘さんはテーブルの上を見渡した。

テーブルの上には、豪華な食事たちが並んでいる。

4人分にしてはかなり多い。

「リア様の身長、わたしと同じぐらいですし、サイズもあうんじゃないかと……思った通り、とても良くお似合いですよ。」

「……それでも、この格好はちよつと恥ずかしすぎます。」

基調とした黒の生地、白とホットピンクのレース、そこらじゅうに結ばれたりボン……。

音甘さんの着ているものよりもかなり可愛らしいデザインだが、それでも、音甘さんの着ているものと同じ種類の服だ。

「大丈夫ですよ。似合ってますから。」

「そ、そういう問題じゃ……」

『ガチャッ』

扉の開く音。

「ほら、お2人が戻られたようですよ。」

「えっ……!」

「お出迎えしないと。」

「えええつ……!!」

「お……おかえりなさいませ……(?)、永斗くん、有逆くん。」

「……………」

ただ目を見開いたのは永斗くん。

「メイドさんが……2人いるね。」

そう言ったのは有逆くんだ。

「おかえりなさいませ、エト様、アルキ様。」

音甘さんもそう言つと、扉を閉める。

「……………お前、なんでその格好……………」

「でも、似合つてるよね。」

「そうでしょうアルキ様。このメイド服、絶対リア様に似合つと思
いまして、着てもらつてみたんです。」

「無理矢理着せられたんです。」

顔が熱い。体が熱い。ていうかものすごく恥ずかしい。

レースにリボンにフリル、なんかヒラヒラしてるモノ、しかも黒に
ピンク……………」

こんなの着たことない。しかも人前……………!!

きつとわたしの顔は、耳まで真っ赤になっている。

「……………可愛いよ? 梨暗、似合つてる。永斗もそう思つてしょ
う?」

「……………」

永斗くんは無言。

一瞬、頷きかけたように見えたのは、たぶん気のせい。

「夕食にいたしましたでしょうか。今日はリア様の歓迎もかねて、たくさ
ん作りましたので。」

「あ、ありがとうございます……………でも、その前に着替えたいで
す。」

「そうですね。・・・もつたいないですけど、メイド服で食事をとるのは慣れないと面倒ですから・・・。わたしも行きますので、お2人は先に食堂へむかってください。」

「実はそのメイド服、アルキ様がわたしにくださったものなんですよ。」

わたしの部屋へむかう廊下の途中で、音甘さんが言った。

「そうなんですか・・・？」

「はい。わたしがそんな服似合わないことを知っていたながら・・・嫌がらせですよ。」

「そう・・・なんででしょうか・・・。」

「そうですね。でも、リア様に似合ってたですよ。差し上げますね。」

「え・・・い、いりません。」

「・・・とりあえずでいいですから、貰っておいてくださいよ。・・・着なくても、いいですから・・・。」

もしかして、音甘さんがわたしにこの服を着せたのは、ある意味の気遣いからだったのかもしれない。

と、いうのは考えすぎだろうか。

でも、わたしはこの家で、なんとか楽しくやっていけそうな気がしていた。

まだ、このときは。

No.5 メイドさんのAfternoon(後書き)

これでノート一冊分が終わりました！

今10冊目なので、今書き終わってるところまで打ちなおすだけでも、

まだかなりあります・・・。

でも、頑張つてさっさと打ちなおして、No.52以降の新しい話が書きたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6678y/>

Cross ~交わるもの~

2011年11月20日19時46分発行